大極殿院鴟尾の検討

－第一次大極殿院の復原研究16－

1　鴟尾使用の有無

建物の外観上大きな印象を与える鴟尾の使用については、今回の第一次大極殿院復原に際しても大きな問題となった。このため平成26年度は、外部有識者を招聘した瓦検討会を開催し、具体的な検討を進めた。

瓦検討会に至る経緯（平成25年度）　これまで平城宮跡では朱雀門と第一次大極殿の復原に際し、鴟尾も復原した。鴟尾は平城宮跡からは１点も出土していない。だが、文献史料から法華寺阿弥陀浄土院金堂や西大寺薬師金堂に金銅製鴟尾を使用していたことがわかる。このため、平城宮の主要な建物にも金銅製鴟尾を使用したと考えた[1)]。大極殿では朱雀門の検討を踏まえ、材質は金銅製、形状等は７世紀～９世紀の出土資料を参考にした[2)]。

今回の検討対象は南門、東西楼、回廊隅の鴟尾である[3)]。これらの建物に鴟尾を使用したのか、使用したならばどのような形状かが問題となる。そこで、日本国内の事例も含め、東アジアの類例を調査した。結論から言うと、大極殿院相当施設の南門や回廊隅への鴟尾（鴟吻）の使用は広く東アジアにみられ、大極殿院南門や回廊隅に鴟尾をのせる根拠は十分にあるといえる。これを踏まえ、平城宮第一次大極殿院では、南門・東西楼・回廊隅に鴟尾をのせることとした。以下、調査の詳細を掲げる。

南　門　宮殿では、平安宮の会昌門（八省院南門、『伴大納言絵詞』）、平安宮豊楽殿院南門（『日本三代実録』仁和３年８月13日条）で鴟尾の存在がわかる。寺院では、檜隈寺、山田寺、四天王寺、西大寺金堂院南門に出土品がある。

国外では、百済陵山里寺（出土品）、李朝の景福宮勤政門・昌徳宮仁政門・昌慶宮明政門に使用していた（『東闕図』）[4)]。北魏洛陽宮城の太極殿院南門（出土品）、唐長安城興慶宮興慶殿南門・同宮大同殿南門（『呂大坊長安城図興慶宮図碑』）、現存する清朝の紫禁城太和門、河北省独楽寺山門、山西省善化寺三門、永楽宮無極門に鴟尾（鴟吻）がのる。

東西楼　東西楼に相当する東アジアの例が見いだせないため、鴟尾についても不明である。

回廊の隅　日本では奈良県山田寺が唯一の出土例である。平安宮八省院回廊隅には鴟尾が描かれる（『年中行事絵巻』）。

李朝の昌徳宮仁政殿院（『東闕図』）、中国の麦積山石窟第４・140窟、敦煌莫高窟45・148・159・172・208・285・296･419・420窟など西魏～唐代の壁画の宮殿図、寺院図にも例がある。北宋の『営造法式』瓦作・鴟尾事件の割注に、回廊隅には合角鴟尾を用いる、とある。紫禁城乾清殿院の回廊隅にも鴟尾（鴟吻）を使用する。

回廊隅の鴟尾は直角に交わる２方向の棟に対応するため、頭部が２つ（双頭）となる。山田寺は単尾だが、平安宮八省院回廊は双尾に描かれている。中国の諸例は単尾が多いが、敦煌莫高窟第45窟（唐代）にある寺院図の鴟尾は双尾であることを現地で確認した。

このように、回廊隅の双頭鴟尾には単尾と双尾の２種があることがあきらかになった。　**（今井晃樹）**

2　瓦検討会

検討会の目的　検討会の目的は、鴟尾の大きさ、デザイン、納まりの検討である。検討会には、以下の有識者６名を招聘して３回開催した。大脇潔（元近畿大学）、佐川正敏（東北学院大学）、亀田修一（岡山理科大学）、花谷浩（出雲市）、田中泉（奈良県）、山本清一（山本瓦工業）（敬称略、順不同）。

南門と東西楼の鴟尾　これらの建物に用いる鴟尾は、すでに竣工している第一次大極殿の鴟尾を基準に検討した。形状は縮小形とし、建物の格に応じて大きさ、文様に差をつけることとした。

南門の鴟尾は『営造法式』に記載された大きさ、建物全体のバランスも考慮し、高さを５尺とした。側面の文様は鰭部の段、縦帯外郭を珠文帯、縦帯内郭を南門所用軒平瓦瓦当文にならった唐草文とした。腹部の蓮華文は大極殿が２つであるのに対し、南門は１つとした。

東西楼の鴟尾も形状は大極殿の縮小形と考え、大極殿院の建物や朱雀門との格差を検討し、南門と同様に復原建物全体のバランスを考慮して、高さを4.5尺とした。縦帯の文様は東西楼所用の隅木蓋瓦に用いられる花雲文とした。さらに、腹部は、東西楼所用軒丸瓦瓦当文から蓮華文を１つとした。

回廊隅の鴟尾　出土資料がある奈良県山田寺回廊所用の双頭単尾鴟尾（７世紀）を参考にするか、平安宮八省

院に描かれた双頭双尾鴟尾を参考とするかが問題であった。大きさは、『営造法式』の記述を参考に高さ３尺程度と考えた。また、第１回検討会の席上、京都市上ノ庄田瓦窯で双頭双尾の鴟尾と推測される瓦が出土している情報を得て、確認・調査をおこなった。　**（中川二美）**

上ノ庄田瓦窯出土鴟尾片　発掘調査成果により、平安時代の平安宮における修復・再建は、旧状に服することを常としたことが判明している。鴟尾のような特徴的な部分も平安宮造営当初の形態を踏襲した可能性は高い。このため、『年中行事絵巻』に描かれた八省院回廊の双頭双尾の鴟尾を参考とし、上ノ庄田瓦窯出土の双頭鴟尾は双頭双尾の可能性が高いと考えた。

上ノ庄田瓦窯は、天長年間（824～834）頃操業の平安宮所要瓦を生産した瓦窯跡である。平成７～９・12年の区画整理事業にともなう発掘調査で、２基の平窯と工房跡の存在があきらかとなった[5)]。

この調査では、約600点の鴟尾の破片が出土した。ただし、鴟尾片の大半が接合できない、廃棄土坑出土や窯の構築材に再利用されている、上ノ庄田瓦窯の操業段階で多量の鴟尾の焼成を想定し難いなどから上ノ庄田瓦窯で焼成された鴟尾とは考えがたく、平安京造営当初に他の瓦窯の失敗作を、窯の構築部材として持ち込んだものと推定される。

検討対象とした双頭双尾鴟尾の破片は（図１、図２・３）、１号窯の前庭部から出土した。右側面の縦帯から鰭部に掛けての破片である。縦帯の突帯は上部でややカーブし、鴟尾中位から上部への変化点付近とみられる。大きさは縦18㎝・横27㎝・厚さ3.5～9.8㎝を測る。縦帯を構成する突帯の幅は３㎝・珠文は径3.6㎝、鰭は一段が縦９㎝・横11㎝を測る。鰭は逆段である。

製作技法は、長さ20～30㎝・径３㎝程度の粘土紐の積み上げである。胎土は、径１～５㎜の白・褐・暗灰色粒を多く含み、西賀茂瓦窯跡群の瓦に共通する特徴をもつ。色調は白色を呈するが、これは窯構築材として２次利用されたためであろう。

鴟尾の鰭部は、遺存する下部で外側に大きく膨らむ。双頭双尾鴟尾は２つの鴟尾の側面と腹部を接合することで成形されると考えられ、鰭部の膨らみはもう一方の鴟尾との接続部分と考えられる。内面は腹部の補足粘土が厚く盛られており、これも２つの鴟尾を腹部で１つに繋ぎ合わせるためと思われる。平安宮出土の鴟尾との珠文や鰭の比較から、この鴟尾は小型（高さ60～90㎝）と推定される。　**（南　孝雄／（公財）京都市埋蔵文化財研究所）**

回廊隅鴟尾５分の１モデルの作成　山田寺例と上ノ庄田瓦窯例はいずれも奈良時代に属さない。そこで、瓦以外の文化的要素や奈良時代と平安時代の連続性といった観点から、回廊隅の鴟尾は上ノ庄田瓦窯例を参考に復原することとした。

まず、上ノ庄田瓦窯例の復原を㈱山本瓦工業、（公財）文化財建造物保存技術協会と共同でおこなった（図４～７）。尾の分かれ目は比較的低い位置に復原され、入隅部は直角をなす山田寺例と異なり、鴟尾の頭部に対し約135度をなす面をもつ形状となる。文様は、鰭部に段、縦帯外郭に珠文、縦帯内郭に段の構成とした。

この鴟尾をたたき台とし、唐招提寺の形状を参考に、より奈良時代にふさわしいデザインの鴟尾を製作しつつ検討を重ねた（図６・７）。具体的には、尾部を頭部側により張り出させ、段を正段とした。また、珠文の内側の段は、文様の面積比率が広くなりすぎるため省略した。珠文帯は入隅部で図６のように途中で消えず、最下部まで連続させる形とした。

３　まとめ

今回の第一次大極殿院の建物復原では、南門には大極殿鴟尾の縮小版を、東西楼には細部文様を変更した鴟尾を使用することとした。さらに、回廊隅部の双頭鴟尾は、上ノ庄田瓦窯例を参考に双頭双尾とすることとした。また、平城宮内では、瓦製鴟尾は出土しないことから、復原される鴟尾は全て金銅製となる。以上の成果を踏まえ、今後は実施設計に向けて細部の検討を進める予定である。　**（今井晃樹・中川二美）**

註

1）大脇潔「朱雀門鴟尾の復原」『平城宮朱雀門復原工事の記録』1999。
2）深澤芳樹「鴟尾の復原」『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究　４　瓦・屋根』2009。
3）今回の復原建物には、大極殿後殿、北門は含まれていない。
4）関野貞『韓国建築調査報告』1905に掲載の写真でも鴟尾（鴟吻）の使用を確認できる。
5）南孝雄「上ノ庄田瓦窯跡」『平成12年度　京都市埋蔵文化財調査概要』㈶京都市埋蔵文化財研究所、2003。

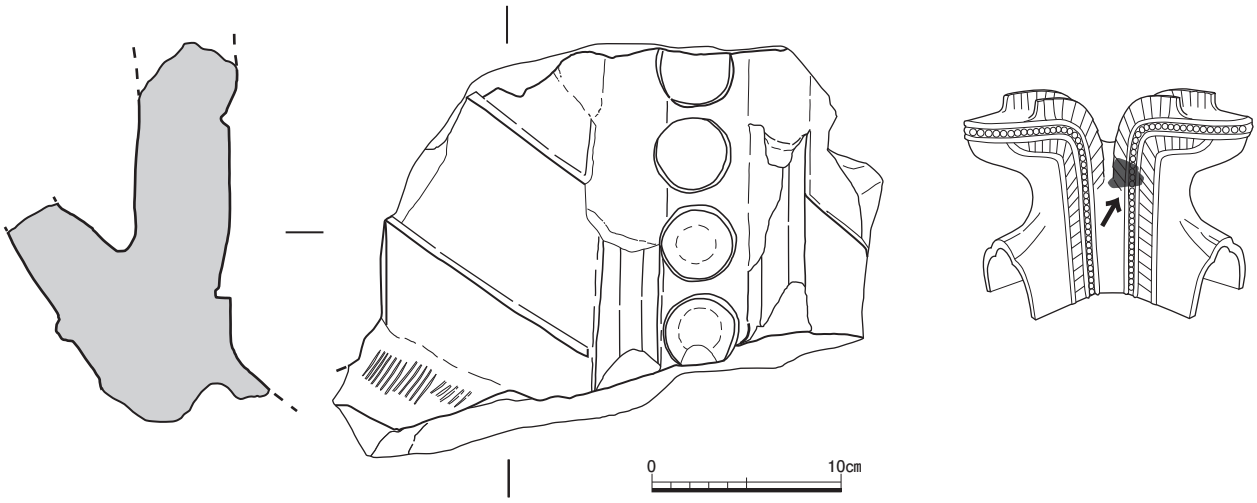

図１　上ノ庄田瓦窯出土双頭双尾鴟尾実測図面（S＝1/4、左）と資料の想定部位（右）

図２　上ノ庄田瓦窯出土鴟尾表面

図３　上ノ庄田瓦窯出土鴟尾裏面

図４　上ノ庄田瓦窯出土双頭双尾鴟尾1/5　復原案（入隅側）

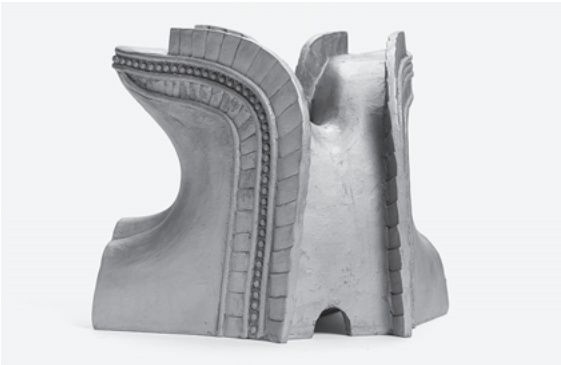

図５　上ノ庄田瓦窯出土双頭双尾鴟尾1/5　復原案（出隅側）

図６　回廊使用双頭双尾鴟尾1/5　復原検討案（入隅側）

図７　回廊使用双頭双尾鴟尾1/5　復原検討案（出隅側）